

17	刈谷	刈谷市立東刈谷小学校	ヤギ アキコ 名前 八木 明子
分科会番号	0 8	分科会名	音楽教育

研究題目

主体的・対話的に音楽活動に取り組み、思いや意図をもって表現することを楽しむ児童の育成
～常時活動を生かした4年生歌唱「ゆかいに歩けば」の実践より～

1 主題設定の理由

本校は昨年度創立50周年を迎えた。創立50周年記念として作曲家のミマスさんとともに、愛唱歌「笑顔を未来へ～みんなの東刈谷～」を令和7年度に作り、地域の方々へ発表した。高学年を中心として愛唱歌実行委員会を立ち上げ、作詞のためのキーワードや題名案を全校児童へ呼びかけて集めたり、曲の構成をミマスさんと一緒に考えたり、歌詞の意味を全校で共有したり、という活動を行った。「自分たちが関わって曲を作った」という経験を経て歌う愛唱歌には、自然と子どもたちの「母校を愛する思い」がこめられ、いつどこで歌っても全校児童の歌声はすてきな響きとなった。

昨年度、そのような体験をした本校には、みんなで歌うことが好きな児童が多い。行事では、全校児童の思いのこもった温かい歌声が聞こえてくる。本学級でも、昨年度に聞いた上級生の歌声に憧れ、よく響ききれいな歌声で歌いたい、と考えている児童が多い。素直で明るい児童が多く、授業中は教師の発問に敏感に反応する。新しく挑戦することに対して好奇心も旺盛である。一方、思いとは裏腹に、声の出し方が分からず、きれいな声で歌おうと思うと身体が緊張して小さな声しか出ない児童や、苦手意識をもって、声をほとんど出さない児童もいた。全体的にきれいな声色だが、響きが少ないため、学級全体の音量を小さく感じるがあった。

そこで「ゆかいに歩けば」を題材に選び、歌唱においての基礎技能を学びつつ、思いや意図をもって仲間と一つになって声を合わせる喜びを感じさせたいと考えた。自分の思いや意図に合った表現の工夫を仲間と考えたり、それらを実現するための技能を継続的に学んだりすることで、自然で無理のない歌い方を身に付け、自分の思いや意図に合う表現を楽しむことのできる児童を育てたいと考え、本主題を設定した。

2 目指す児童像と研究の仮説

(1) 目指す児童像

- 音楽を形づくる要素に目を向け、身に付けた基礎技能を生かして自分の思いや意図を表現することを楽しむ児童
- 仲間と考えを出し合い、互いの思いや意図を受け止めながら話し合う中で、音楽的な見方・考え方を働かせ、よりよい表現を考え続ける児童

(2) 研究の仮説

目指す児童像に迫るために、以下のように仮説を立てて実践を進めた。

- 【仮説Ⅰ】音楽を形づくる要素を意識した常時活動を位置付け、思いや意図を表現するための基礎技能を継続的に身に付けさせたり、思考のつながりを意識した題材構成にしたりすることで、児童は自分の思いや意図をもって表現することを楽しむようになるであろう。
- 【仮説Ⅱ】音楽的な見方・考え方を取り入れながらお互いの思いや意図を協働的に話し合う場や、客観的に歌声を振り返る場を設けることで、児童は互いの考えを受け止め合い、よりよい表現を考え続けるようになるであろう。

3 仮説に対する具体的な手だて

(1) 仮説Ⅰに対する具体的な手だて

手だて1 音楽的要素を意識し、楽しみながら技能を育てる常時活動

年間を通して、題材に必要な音楽的要素に合ういくつかの常時活動を取り入れている。カレンダーに音符をはめて即興的にリズムをたたく「リズムカレンダー」、チャルメラの旋律をリコーダーのさまざまな奏法で吹く「わらびもち屋さん」など、短くて児童が簡単に取り組める内容にしている。本題材では、歌唱に関係する4つの常時活動(資料1)を取り入れる。遊び要素のある活動を取り入れることで、楽しく柔らかい雰囲気の中、歌唱に抵抗なく取り組むことができるだろう。また、題材の中で継続的に取り入れることで、技能が自然と身に付くようにする。常時活動を積み重ねていくことで、思いや意図を表現するための技能を育て、児童の表現活動の引き出しを増やすことを目指す。

資料1 本題材で選んだ常時活動(歌唱)

①「小さな世界」→音の高さ・強弱

- ・曲想に合わせて体の動きを変える。
- ・後半のゼクエント部分で、強弱と音の高さの関係を意識して歌う。※④も活用

②「線路は続くよどこまでも」→スタッカート

- ・後半部分を「ホ」で歌う。丹田を支え合う。

③「北海道のじゃがいも」CMバージョン→強弱

- ・「ゆかいな牧場」の旋律。じゃがいもをおいしそうに宣伝するという設定で歌う。

④手指の五線譜→音の高さ・音の重なり

- ・手指を五線譜に例え、反対の手指で音の高さを確認しながら歌う。

手だて2 音楽的要素を1授業につき一つに絞り、思考のつながりを意識した題材構成

本題材では、児童が思いや意図をもちやすくなるように、1時間で扱う音楽的要素の一つずつに絞って授業を構成する。第1時で曲の特徴を共有した後、第2時で前半の旋律においての「スタッカート」、第3時で後半の「強弱」、第4時で「音の重なり」を扱う。一つの要素に絞ることで、目的をもって技能を身に付けやすくなるだろう。また、話し合いが焦点化され、児童は思いや意図を話しやすくなるだろう。さらに、次時への思考のつながりも意識して題材を構成する(資料2)。つながっていく思考の中で、児童の思いや意図をもった表現への意欲が自然に高まることをねらいとする。

(2) 仮説Ⅱに対する具体的な手だて

手だて3 音楽的見方・考え方を意識して話し合いを円滑に進めるための環境づくり

授業内で話し合いをする際には、「音楽的見方・考え方」を意識できるように場を設定する。音の高さやフレーズなどの音楽的要素を意識できるように、楽譜を常に提示する。

班活動ではホワイトボードとマグネットを使って強弱を提示し、音楽的要素を簡単に可視化できるように留意する。マルチイヤーホンスプリッターで音源を共有して歌いながら話し合いをする場を設けたり、話し合いの途中で新しい意見が出た時に実際に歌って確かめたりすることで、話し合いの中で常に音楽的見方・考え方を意識できるようにする。

手だて4 録音による毎時間の振り返り

毎時間、授業の振り返りや、話し合いの途中で歌を録音し、比較聴取する場を設ける。客観的に比較聴取することで、よりよい表現を考える話し合いが活発になることを期待したい。また、授業の最後に録音した歌を聴くことで、表現の深まりや、仲間と一つの表現を創り上げた喜びを感じさせたい。

資料2 思考のつながりを意識した題材構成

第1時：曲のとくちょうをつかもう

- ・歌詞の内容から歌い方をイメージする。
- ・前半と後半の歌い方の違いに気付く。

「ホホホ…」のところが上手に歌いたいな。

↓

第2時：前半のせりつのとくちょうを生かした歌い方を工夫しよう。スタッカート

- ・息をしっかりと入れてスタッカートを歌う。
- ・常時活動の「線路～」の歌い方を想起する。

スタッカートで歌うと楽しいね。

後半の歌い方はどうしようかな。

↓

第3時：後半のせりつのとくちょうを生かした歌い方を工夫しよう。強弱

- ・音がだんだん高くなっていることに気付く。
- ・ふさわしい強弱記号を班で考える。

強弱をつけると、表現が深まるね。

もっと深めるにはどうしたらいいかな。

↓

第4時：下パートを重ねて歌おう。音の重なり

- ・手指の五線譜を使って、音の高さを確かめ、一音ずつ音を重ねる。

難しいけど、一音ずつなら重なった。

音が重なるときれいだな。

下

次題材： **もっと音を重ねてみたいな。**

4 抽出児Aのとらえと願う姿

児童Aは、4月から「音楽の授業が好き」「次はどんな曲を歌うのかな」とよく発言しており、音楽への関心が高い。しかし、実際の授業では、口を小さく開け、周りを気にしながら不安そうに歌う姿が見られ、自分の歌い方に自信がもてない様子が伺える。また、歌詞から曲想をイメージし、文章に表すことはよくできているが、音楽的要素との関わりに気付くことはほとんどない。本題材では、児童Aが音楽的な見方・考え方を働かせながら、友達と関わり合って主体的に活動に取り組み、楽しみながら自分の思いを音楽や言葉で表現できるようになることを期待したい。

5 実践と考察

(1) 前題材からのつながりを生かし、「小さな世界」で初めて強弱を味わった児童（手だて1・2）

第1時の導入として、音の高さと強弱の関係に気付かせることを目的に、前題材の既習曲「小さな世界」を取り入れた。始めに常時活動として身体を動かしながら歌った後、後半のゼクエンツの部分に着目させた。常時活動「手指の五線譜」で、音の高さを確認しながら階名で歌うと、子どもたちは後半、音が少しずつ上がっていることに気付き、「山みたい」「階段みたい」と話した。そこで、「山みたいに歌うにはどうしたらよいか」と問うと、「だんだん大きくする」と答えた児童が多かった。何度か試して歌った後、児童Aは「ジャンプの前にしゃがむみたいに最初は小さい方がいい」と答えた。そこで強弱記号の意味と、表現方法を「大きく」「小さく」から「強く」「弱く」という言い方に変えることを伝え、みんなで「弱く」から歌った。学級全員で初めて強弱のダイナミクスを体感した児童たちは、「おお」「すごい」と驚き、「みんなで手をつないでいるような感じ」「音の階段みたい」「世界が小さい感じから大きくなる感じ」などと目を輝かせて発言した。児童Aも歌声の変化を感じ取った様子で「みんなで一つになる感じ」と発言した。常時活動で身に付けた音楽的要素を活用することで、思いをもった表現方法を考え始めた児童の姿が見られた。

「手指の五線譜」で音の高さを確認する児童



(2) 常時活動の中で表現の仕方を考えながら、強弱の表現技能を身に付けていった児童（手だて1）

第1時では、常時活動の発声練習「北海道のじゃがいも～CMバージョン～」も活用した。基礎的な発声技能に加え、強弱を歌い分ける技能の定着を目的とし、継続して取り組んだ。「ゆかいな牧場」の旋律に乗せ「北海道のじゃがいも、おいしいおいしいよ」と楽しく歌う中で「おいしそうに感じるような歌い方をしよう」と声かけすると、子どもたちはまず、ぱっと明るい表情になった。「言葉がはっきり聞こえるように最初の『ほっ』は、顔の前に手を当てて、温かい息を勢いよく出してみよう」と声かけすると、自然と息と丹田をしっかり使った勢いのよい発音で歌うことができた。ト長調から半音ずつ高くしていくに連れ、「どのくらいの大きさのじゃがいもにする?」と問うと「げんこつくらいの大きいじゃがいもが口に入る感じ!」「実際にげんこつで試してみよう」と、高い音域でも楽しい雰囲気でも口を開くことができた。児童Aにも自然と笑顔で口をよく開く姿が見られた。また、途中で「熱いじゃがいもが口に入ったよ、どうやって歌う?」と問いかけると、「ほっはいほーの、はいはいほ」と、唇を付けずに歌い、のどの奥を自然に開いて柔らかな声色で歌うことができた。響きのある声で歌う基礎技能を身に付けながら、「こう歌いたい」という思いを意欲的に発言する児童の様子が見られた。

続けて、子どもたちにそれぞれの強弱についてのイメージを尋ねると「pは寝ている赤ちゃんに向かって歌う感じ」「mpはとなりの子にこっそり『おいしいよ』と伝える感じ」「教室でお話しているくらいのmf」「体育館でみんなで歌うときのf」といった意見が出てきた。歌う直前にそれらの言葉を使って声かけをすると、子どもたちは気持ちを合わせて、みんなで強弱のある歌声を生み出すことに夢中になった。児童Aは「となりの子にこっそり伝えるmp」を気に入った様子で、隣にいた児童と向き合い、笑顔で発声していた。その姿から、児童Aの表現方法の幅が広がったことを感じた。

(3) 曲調の違いを感じ取り、既習の内容を振り返りながら演奏方法を考え始めた児童（手だて2）

第1時の本活動では、強弱記号のついていない楽譜を見ながら範唱CDを聞き、曲の感じをつかんだ。前題材「陽気な船長」で、前半と後半の曲想の違いを学んでいた児童たちは曲想から『陽気な船長』みたいに、弾んだり流れたりしている」「なめらかになったり弾んだりしている」とすぐに意見が出てきた。歌詞にも着目することを伝えると「自然の中でピクニックに行っている感じ」「晴れている感じ」と次々に意見が出てきた。児童Aは『風もあおい』というのがあるから、風の色は見えるのかなと思いました」と振り返りに書いたことから、歌詞に着目して歌への思いをもち始めた様子が分かった。

前半の歌い方について、「弾んでいる感じで歌いたい」という意見が多数出た中、前題材にリコーダーの奏法として学んだ「スタッカート」を想起し「スタッカートを上手に歌いたい」という意見も出た。後半は「なめらかに歌いたい」「うまく歌えたら気持ちよさそう」「盛り上げていきたい」という意見が出た。その日の振り返りに児童Aは「どうやってスタッカートを歌うのかな」と書いた。別の児童が「後半はお腹を使うとスタッカートを歌える」と書いていたため、児童たちの振り返りをまとめたものを教室に掲示し、児童Aの問いと児童Bの答えが一緒に見られるようにした。（資料3）児童Aが、音楽的要素と表現方法が関わっていることに気づき始めたことが分かった。

資料3 第1時振り返り教室掲示の一部

ホホホをあなかをうまく弾ったうまくできた
アは元氣よくはずれていてイはなめらかでやさしい感じ
ホイップクリームみたい
ホホホ階段みたいになっている
ホホホがうまくできなかったの、次回は上手に歌えるようになりたい
もう少し大きい声を出して歌いたい
アをもうちょっとうまくなりたいな
バルデロをもっと大きな声を出せるように次回練習したい 次回どうすれば大きな声で歌えるかを考えたい。
みんなで合わせたら、合唱みたいになって声があってきれい

(4) 常時活動を活用し、スタッカート奏法を楽しみながら身に付けていった児童（手だて1）

前半を「弾むように歌いたい」という子どもたちの意見に応え、常時活動の発声練習「線路は続くよどこまでも」を第2時の始めに取り入れた。前時の児童の振り返りを活用し、前半部分をどのように歌いたいか改めて児童に問うと、掲示を事前に見ていた児童は口々に「お腹を使う」「ホホホの歌と同じ」と答えた。「線路は続くよどこまでも」の後半の旋律を全て「ホ」の発音で歌うこの練習は、児童同士で腹部を支え合い、腹式呼吸と頭声発声を自然に身に付けられる常時活動である。低い音域から半音ずつ高い音域に上げていく中で、児童のよい

支え合って歌う児童



ところを「お腹の支え方」「お腹の動き方」「口の開け方」「声色」「声の響き」「表情」「姿勢」「視線」などにポイントを焦点化して評価・価値付けをしていった。音を上げるタイミングで、楽しい雰囲気を保つために伴奏のベース音を切らさないようにしつつ、一人一人の名前を呼んでよいところを伝えていくと、子どもたちは生き生きとした表情で歌い始めた。2人または3人のペアで行うため、声をかけやすい人数となり、声をかけられた児童は、照れながらも自信をつけた表情でさらに声を響かせていた。最終的には5分ほどで全員を褒めることができた。児童Aにも「お腹の動きがいいね」と声をかけたところ、自然に笑顔になり、響く声のまま音量を上げることができていた。支えながら歌っている児童にも目を向け、常によいところを声かけしていくことで、学級全体の歌声が一つとなり、「もっと音を上げて!」「まだ歌える!」とさらに高音を響かせることに挑戦していく姿が見られた。

(5) マルチイヤホンスプリッターを使い、協働的な話し合いを活発に行なった児童（手だて3）

第2時から、マルチイヤホンスプリッターとタブレットを使い、4人班で一緒に歌い方を練習し、話し合う活動を取り入れた。イヤホンは片耳のみ付けることとし、前半のみの短いフレーズを歌い終わったら、その場で、感想などを話し合うことを指示した。タブレットの再生ボタンをクリックするとすぐに音源が流れることや、イヤホンから伴奏が直接聞こえてくることで意識が音に集中しやすいことなど

から、子どもたちは夢中で何度も歌うことを繰り返していた。始めは「もう一回」とすぐに歌いたがっていたが、「どうだった？」と机間指導で聞いていくと、『『お・ひ・さ・まー』のところは言葉を一つずつ句切る感じで歌いたいな』『きらっきーらー』の『ら』は、一番高い音だから、強く出したい」という意見が出てきた。「確かにね。他にもあるかな」と声をかけると、班で自然と話し合いが始まった。自分たちで考えた歌い方を試してみたいという思いから、さらに何度も歌って確かめてみる姿を見ることができた。学級全体での話し合いも、班で話し合った歌い方を提案する児童に合わせ、全員で歌って確かめながら進めた。音が一番高いところで盛り上げて歌うと楽しいと気付いた子どもたちは「もう一回やろう」と、何回も全員で歌うことを希望した。子どもたちは「きーらっきーらー」の「ら」の部分の歌い方をとても気に入った。『『きらきら』を盛り上げるために、『おひさま』はどう歌おうか』と問うと、始めは「元気に歌う」「切って弾んで歌う」と答える児童が多かったが、ある児童が「音がだんだん高くなっているから、『小さな世界』のときみたいに、小さい音から大きくするといい」と発言した。「小さな世界」のことを想起することで、子どもたちは納得した。第1時での児童Aの「ジャンプの前にしゃがむ感じ」という言葉を引用して子どもたちに呼びかけると、児童Aと目が合い、とてもうれしそうに頷いた。その後、児童Aが自信をもって口を大きく開き歌う姿が見られた。さらに児童Aは、言葉を句切って歌うことを発言した。そこで「おひさま」の部分を区切ってクレッシェンドする練習を繰り返すと、第1時の「小さな世界」のような盛り上がりと一体感を感じることができた。子どもたちは「おお、盛り上がった」と驚いていた。音楽的見方・考え方を意識した場を設定したことで児童たちから音楽的見方・考え方を含み発言が出るようになり、話し合いが活性化した。児童Aは振り返りに『『お○ひ○さ○ま』と切って歌えた』と図を交えて書いていた。児童Aが音楽的な考え方を身に付けてきたことが分かった。

(6)意見を可視化しながら強弱記号について話し合い、録音を比較聴取する児童(手だて3・4)

第3時では、「盛り上げて、なめらかに歌いたい」という子どもたちの思いを表現しやすくするため、まず前述の常時活動「北海道のじゃがいも」「手指の五線譜」で「強弱」と「音の高さ」を確認した。その後、班活動で曲にふさわしい強弱記号を考えた。あらかじめ楽譜に強弱記号を考えて書き入れたものを持ち寄り、第2時と同様に、歌いながら強弱を確かめていった。強弱を視覚化しやすいよう、班に1つのホワイトボードに楽譜を貼り、マグネットで強弱を自由に貼り替えられるようにした。1から4番目の強弱をまず班で考えるよう、伝えた。児童Aは始め「m p → m f → f → f」と考えていた。さらに『『バルデリー』という歌詞が外国語のようだから外国語で歌うみたいに元気に歌いたい』という思いをもっていた。他の児童の「p → m p → m f → f」という意見を聞き、児童Aは「いろいろと試してみたい」という思いが強くなった様子だった。新

資料4 第2時板書



資料5 「ゆかいに歩けば」板書より



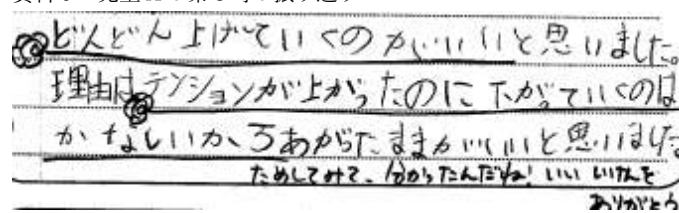
しい意見が出る度に「じゃあ歌ってみよう」と班で話し合いながら試行錯誤していた。「どれがピンとくる？」など、児童同士で盛んに意見を交わしていた。しかし、児童Aの班は、結論が出ないまま班活動の時間が終わった。全体で話し合いをする場で多数の班が「 $p \rightarrow m p \rightarrow m f \rightarrow f$ 」と順に強くする強弱記号を発表した。全員で歌って確かめると「階段みたい」「背伸びした感じがした」「盛り上がる」という意見が出た。すると児童Aが挙手し「私も、『だんだん強くする』がいいけど、一回『 $f \rightarrow m f \rightarrow m p \rightarrow p$ 』にするとどうなるか試してみたい」と発言した。強弱を変えて歌うといろいろな表現の仕方ができる、と気付いた上での発言だった。そこで全員で歌って試してみた。歌った後、「坂道のスロープを下ってるみたい」「『高い』から『低い』は盛り上がらない」「今まで味わったことのない感じ」「階段が下がっているみたい」「最後が疲れ切っている感じ」とたくさんの意見が出た。児童Aも思わず笑ってしまうくらい、不思議なフレーズになった。しかし、逆のパターンを歌い試したことで、こまが回り始めるように子どもたちの思考はぐんぐんと進んだ。ひとしきり話し合いをした後、子どもたちは自分たちが始めに考えたクレッシェンドのパターンに自信をもてたようだった。最後に「で、後半はどう歌いたいか」と尋ねると、「盛り上げる方で歌いたい!」と児童たちは元気よく答えた。

ホワイトボードを使った班活動の様子



さらに、強弱の効果を感じることができるよう、5番目の強弱を全体で話し合った。6番目が $m f$ であることを先に提示した上で、5番目を一度弱くするか、強く歌いたいか話し合い、両方のパターンを録音し、全員で聞いたところ、意見は分かれた。5番目の

資料6 児童Aの第3時の振り返り



強弱記号は、教科書では $m p$ だが、他の楽譜では様々な強弱記号が実在する。好みによって強弱の付け方は分かれてもよいことを児童に伝えた。児童Aは振り返りに資料6のように書いた。仲間と話し合い、歌い試す中で、児童Aが音楽の表現の幅を広げることを楽しんでいる様子がよく伝わってきた。

(7)音を重ねる児童(手だて1・2)

第4時では、前時の「もっとみんなで盛り上げたい」という子どもたちの気持ちを汲み、下パートに挑戦した。常時活動「手の五線譜」を活用し、一音ずつ音の高さを確かめながら声を重ねた。ペアの子とパートを分け、互いの手をかざし合って声を合わせた。ペアと協力して音を重ねる活動は、心地良い緊張感が生まれ、児童の集中力が増した。振り返りでは「重なるときれい」「いつもより盛り上がった」など、表現の幅が広がったことに気付いた児童が多く見られた。録音を活用し、自分たちの音の重なりを客観的に聴いた。児童Aは「音が合っていたのでよかったです。重ねて歌って、みんな上手になって分かりました」と振り返りに書いた。思いをもって仲間と協働的に歌唱を楽しむ児童Aの姿が見取れた。

6 研究のまとめと今後の課題

本研究では、ねらいに合った常時活動を都度繰り返して取り組むことにより、児童に技能が定着しやすくなった。基礎技能が定着した上での協働的な学びは、子どもたちの自然な対話を生み、児童同士が同じ目線で表現方法の工夫を話し合うことができた。皆で一緒に表現を考え、歌い試す子どもたちの生き生きした表情は、本研究の成果と言えるだろう。一方、思いを表すための語彙が少ない児童が多く、思いをなかなか言葉で表現できない場面があった。本研究では教師が言い換えて表現することで理解し合うことが多かった。今後、音楽的な見方・考え方に関する語彙を増やしていく活動を取り入れることで、子どもたちがさらに自由に自分の思いを表現できる素地を培っていかれたらと願う。